



10月「Fotografie」 アントニア・シュルト

1. 写真を撮るのはほぼ毎日のことですが、記事のテーマにするのはこれで二回目になると思います。一回目の時からかなり時間が経って、撮り方も写真に対する想いも少し発展してきたと思いますので、また書いてみると面白いかと思いました。

2. まず言葉から考えてみましょう。写真というのは英語やドイツ語で「Photo」または「Foto」といいます。発音も、書き方も似ているのはたまたまではなく、どちらも語源がギリシャ語にあるためです。1839年に、Sir John Herschelというイギリス人の研究者が初めて、二つのギリシャの言葉を組み合わせて、作った言葉です。

「Phos」というのは、「光」という意味で、「graphie」の意味は「書く・描く」です。ちなみに、「Photo」というのは「光でかく」という意味になります。言葉の意味が分かったら写真を撮るときは何より「光」が大事だということが腑に落ちますね。光が多すぎるとき、または少ないときにいい写真はなかなか撮りにくい状況です。日本語の「写真」を分解してみれば、「写す」と「真」で書きます。考え方としては現実がそのまま写されているものですね。世界の最初のフォトグラフィー＝「ダゲレオタイプ」の発明が、1822年で、そのわずか10年後の1849年には、日本に伝来しました。意外なことに、「写真」ということばは、西洋からフォトグラフィー（Photography）が伝来したときに訳されて命名されたのではなく、フォトグラフィーが発明される何百年も前から「写真（鏡）」という日本語（というか漢文）が存在していました。このフォトグラフィー以前の写真とは、（王様や身分の高い）人物の姿をそっくりに描くことを指しています。



3. 話は少し飛びますが、スマホをはじめ、持ち歩きやすいカメラが手ごろな価格で手に入るようになりました。その結果、だれでも、いつでも、どこでも写真を撮ってしまいます。「しまう」というのは、「無意識に」または「反射的に」撮るという意味で使いました。インスタグラムなど、の写真を中心としたSNSによって自分の人生を写真や短い動画をとおして記録するのが普通になりました。人によって使い方が異なるのを前提として、自分の人生をそのまま、正しく、真に伝えるというより、自分の人生を描くという目的で、写真をツールで利用する人が多くいるのではないかと思います。もちろん、言葉通りの使い方、写真をとおしてできるだけ現実をそのまま伝えようとする写真家たくさんいます。しかし、やはり特にSNSで求められているのが現実より素晴らしいものというか派手な色、美しい体や顔などです。そういうのが間違っているとは言っていないが、ただ写真の使い方と本物とフェイクの見分けが困難になってしまうし、写真の価値をインパクト力で計ることになります。現実よりアレンジした現実の方が魅力的にみられるのではないかという恐れは少しありますね。だから、最近、撮った写真をあまり編集せずアップロードするようにしています。目的が反応ではなく、現実の記録で、自分が見た景色をそのまま残すことにあります。素晴らしい写真を撮らないといけないというプレッシャーも軽くなるという副効果があります。